

# 十全同窓会会報

〒920-8640  
金沢市宝町13の1  
金沢大学医学部  
十全同窓会  
編集委員会  
印刷/ヨシダ印刷(株)

## 卒業生に贈る言葉

### 拝啓 卒業生の君へ

医学部長 金子周一



拝啓 この同窓会会報を読んでいる皆さんは、どこで何をしていますか？青春の思い出を胸に六年間を過ごした金沢の地を離れ、どこかの都市の病院の机でしようか。住み慣れた金沢の研修医室でしようか。アンジェラの歌ではありませぬが、現実には追われる日々の中で、誰にも話せない悩みの種も出てきている頃でしょう。初期研修医として、医師という

仕事の重要性や、生命に対する畏敬の念を感じはじめています。医学の進歩がいかに素晴らしく、それを駆使することがいかに大切であるかを知ったばかりかもしれません。目の前の現実には、学生の時に考えていた勤務先や専門を変えようと思うこともあるでしょう。あるいは思い通りにならない自分と比べ、周りの研修医がずいぶんと立派に見えているかもしれません。

皆さんは全国の八十八大学の医学部の中でトップクラスの成績で金沢大学に入学しました。この六年間に学んだ内容も全国のトップクラスです。解剖学に始まる医学生としての教育。コアカリキュラムで示される基礎知識、国家試験合格に必要な知識。この六年間は医学においても魅力的な期間でした。ポストゲノムの遺伝子研究、幹細胞研究、標的治療薬など、

次々に明らかにされる新しい医学も学びました。トップクラスの医師として活躍するべく卒業しているのです。

皆さんは、金沢で何者に育ったのでしょうか。他大学の先生や、他大学から来られた先生は、数値や統計ではあらわせないものの、金沢大学の学生はちよつと違うと言われます。それが何であるのか、歌の通り、今、皆さんは問い続けて答えを出そうとしています。このところ、私は金沢大学の卒業生から外国の大学や病院に提出する証明書に署名を依頼されることが多くなっています。日々の業務に追われて、病院や都会に埋もれてしまうことないように、夢や志をもって進んでください。六年前と同じように、今年も金沢大学には優秀な学生ができてくれました。それも、卒業生の皆さんが出し続けている答えのひとつだと思っています。

自分のことだけでも大変なのに、平成二十年度の卒業生は医療を取り巻く環境や、研修制度の変更、さらには世界の景気など、ちよつと周りの重たい様子が気にかかるかもしれません。映画「おくりびと」にオスカールが贈られ、「悼む人」が直木賞をとるように、世界はゆつくりと考える時期にはいつているのかもしれない。自然と文化が薫り、落ち着いた雰囲気の中、戻ることのない大切な青春を過ごした皆さんが、この時代に大きく芽を伸ばしてくれているのではないかと期待をしています。どこかで、この会報を読んでいる皆さんが自分の声を信じて歩き、幸せなことを願います。

平成二十一年度  
金沢大学医学部十全同窓会総会

日時：平成二十一年七月四日(土)

午前十時

場所：医学部記念館

- 一、開会の辞
- 一、議長選出
- 一、議長挨拶
- 一、物故会員に対する黙祷
- 一、会務報告 理事長
- 一、医学系研究科報告 医学系研究科長
- 一、医学類報告 医学類長
- 一、支部報告
- 一、議案審議
  - (一) 平成二十年度決算
  - (二) 平成二十一年度予算(案)
  - (三) 役員改選
  - (四) その他
- 一、閉会の辞

#### 《教授就任講演》

村松 正道 教授

分子遺伝学(生化学一)

「デアミナーゼとゲノム高頻度変異」

和田 隆志 教授

血液情報統計学(臨床検査医学)

「臨床検査医学の新たな

展開にむけて」

櫻井 武 教授

分子神経科学・統合生理学(生理学二)

「新規生理活性ペプチドの探索と機能解析」

#### 《懇親会》

教授就任講演は、脳医学専攻・がん医学専攻・循環医学専攻・環境医学専攻のCoordinatorを兼ねます。石川県医師会生涯教育研修会指定を受けております。多数ご来聴下さい。

十全同窓会会長 佐藤 保

教授就任挨拶

堀 修博士

神経分子標的学(解剖学第三) 教授に就任



本年四月十六日付で金沢大学医薬保健学系神経分子標的学講

座(解剖学第三)を担当させて頂くことになりました。私は平成元年に大阪大学医学部を卒業し、その後約四年間、主に脳血管障害(脳梗塞、高血圧)、神経変性疾患(筋萎縮性側索硬化症)の診療に従事致しました。ここでの経験から、私は神経系疾患の治療に結びつく新たな基礎研究の必要性を感じ、以後、「細胞内ストレス応答を利用した神経細胞死の克服」と言うテーマで研究を行って参りました。具体的には、虚血ストレスに強いアストロサイトからストレス関連遺伝子を単離し機能解析を行うと共に、それら遺伝子を用いて神経細胞を救済する取り組みを行いました。そしてその過程で、細胞内小器官の一つ小胞体の環境維持が、細胞がストレス下を生き抜く

上で極めて重要であることを発見致しました。平成十一年からは本学神経分子標的学講座にてお世話になり、小胞体におけるストレス応答について研究を進めると共に、小胞体環境を改善する化合物の探索、更にそれらを用いた神経細胞死の克服に取り組んで参りました。また、私は本学において、神経解剖学及び発生学の教育に携わらせて頂き、学生が脳の構造・機能を系統的に理解する事を目標に、講義および実習を行って参りました。

今後、私はこれまでの経験を生かし、臨床医学をゴールとした基礎的研究(トランスレーショナルリサーチ)を進めると共に、医学部および大学院の教育にも力を入れ、金沢大学の益々の発展に貢献させて頂ければと考えております。微力ではございますが、何事にも全力で取り組む所存でございますので、ご指導、ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

尾崎 紀之博士

神経分布路形態・形成学分野(解剖学第二) 教授に就任



この度平成二十一年五月一日付で、金沢大学医薬保健学系神経分布路形態・形成学分野(解剖学第二)教授を拝命いたしました。

私は昭和六十二年に山形大学医学部を卒業後、大学院を修了し、福島県立医科大学解剖学教室助手、米国アイオワ大学への留学を経て、平成十三年より名古屋大学大学院医学系研究科機能形態学講座にて解剖学の教育研究に従事して参りました。その間、痛みとくに内臓痛メカニズムの解明を目指して研究して参りました。

内臓痛は臨床上重要であるにもかかわらずメカニズムの解明が遅れ、しかも体性痛とは異なった性質が明らかになっていません。また、機能的胃腸症などの機能的消化管障害が近年注目を浴びています。私達は胃潰瘍や胃炎の痛

みには神経成長因子による胃の知覚神経の感作が重要であることや、癌性疼痛、筋痛、顎関節症の痛みには、イオンチャネルの発現亢進が関わっていることを明らかにしてきました。今後は、痛みの神経の感作のメカニズムや機能的胃腸症の解析を進め、メカニズムに基づいた痛みの治療法を開発したいと考えています。

医学の進歩は臨床上研究上必要な解剖学知識の増加をもたらす一方、解剖学教育にかけ得る時間の減少をもたらしています。マルチメディアなど新しい教材の導入を試みながらも、現代の医療に必要な解剖学的知識をしっかりと伝えることで優れた学生を育てたいと考えております。

歴史ある金沢大学で研究教育に従事できる機会を与えて下さったことに感謝いたしております。金沢大学の更なる発展に寄与できるよう努める所存です。導き、十全同窓会の諸先生方のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

中山 光男博士(昭和五十七年卒業)  
埼玉医科大学総合医療センター 呼吸器外科



平成二十年八月一日付けで埼玉医科大学総合医療センター呼吸器外科教授を拝命しました。私

は昭和五十七年に金沢大学医学部を卒業し、慶應義塾大学医学部外科教室(肺外科研究室)に入局しました。気管支支再建手術を中心とした臨床および研究に従事して学位を取得した後、米国スタンフォード大学に留学して急性肺障害の研究を行い、立川共済病院勤務を経て、平成九年に埼玉医科大学総合医療センターに赴任しました。赴任後は肺癌のみならず炎症性疾患や気管支管支病変の外科治療に取り組み、この度、菊池功次前教授(昭和五十一年卒業)の後任として教授に就任しました。改めて大学人としての責務を全うすることの大変さを実感しておりますが、気持ちを新たに呼吸器外科学および埼玉医科大学の発展に貢献するため尽力する所存です。今後は、合併症が少なく患者満足度の高い呼吸器外科手術の完成を目指し、患者の個性に基づいた肺癌の集学的癌治療を実施し、治療成績向上に寄与する臨床研究も行いたいと考えています。また、将来の呼吸器外科学を担う優秀な若手呼吸器外科医の育成にも力を注ぐつもりです。十全同窓会の皆様には今後ともご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

春の叙勲

瑞宝小綬章

木谷 榮一

(昭和三十七年卒業)

旭日双光章

川北 篤

(昭和三十年卒業)

清水 眞澄

(昭和三十一年卒業)

瑞宝双光章

筑田 正志

(昭和三十五年卒業)

第三十七回医療功労賞受賞

生垣 茂

(昭和三十三年卒業)

万が一遺漏がある場合は御寛恕の上お知らせ頂ければ幸いです。

田中重徳教授、古川仍教授  
退職並びに退任教授講演会・記念式開催

平成二十一年三月七日(土)、平成二〇年度をもって定年退職された田中重徳教授と平成十九年度をもって退任された古川仍教授の最終講演会と記念式が医学部十全講堂と記念館で盛大に開催された。

最終講演会では田中教授は「世界極上献体への深謝と秀逸人材育成の実務体験」と題し、肉眼解剖教育と献体事業に関する講演をなされ、古川教授は「EBウイルス研究から学んだ三十五年」と題し、EBウイルスと頭頸部癌との関連性に関する講演をなされた。いずれも感銘深い講演であり、多くの聴衆を魅了した。また記念式では、中沼安二実行委員長(健康福祉部参事(谷本正憲知事代理))、佐藤同窓会長の祝辞につづいて、退職・退任された田中教授、古川教授から挨拶があった。つづいて記念品・花束の贈呈、医学部排球部主将の寺川君と医学部ゴルフ部を代表して小林英士君のスピーチがあり、佐藤同窓会長の発声による乾杯の後、祝宴に移った。同窓・同門の先後輩や教え子たちとの交歓は名残尽きず、約



二時間が瞬く間に経過し、山本博医薬保健研究域長の音頭による万歳をもって盛会裡に散会した。  
(医学系長・医学系研究科長 中沼 安二記)

本学医薬保健学域保健学系  
医療科学領域病態検査学教授に

稲津 明広 博士

(昭和六十一年卒業)

# 退任にあたっての回顧深謝

## 神経分布路形態・形成学分野(解剖学第二) 田中重徳



私の生誕(昭和十八年七月五日、於長野県松本市)は太平洋戦争(昭和十六年十二月八日から昭和二十年八月十五日)の頃であり、昭和中期の日本国は多難情況であり、天皇、大臣・国会議員、省庁・会社の方々と学校の先輩が国改善発展と優等人材育成の為に秀逸思维教導をされた。

小生は医学部を卒業した昭和四十三年三月の二ヵ月後に、東北大学医学部解剖学第一講座の教授が定年退職後に就任された岩手医科大学解剖学第一講座の助手に就任させて頂き、若者として、人体の三次元形態を学生にしっかりと教える知識と実習技術、そして研究技能を開発・発展することを指導して頂いた。昭和四十五年一月、卒業大学の解剖学講座の助手に就任させて頂き、教授が解剖学実習技術と組織学の研究開発発展の指導と共に、昭和四十五年四月から八月末まで、東京医科歯科大学の脳解剖学講座に行かせて下さり、偉大な教授が脳の広範囲の三次元形態説明を教えて下さった。昭和五十年一月に、秋田大学の新規医学部解剖学第一講座の助教授に就任

し、教授が電子顕微鏡活用の研究指導をして下さった。そして、昭和五十年九月にドイツ連邦共和国のWurzburg大学医学部解剖学教室に留学させて頂き、教授と教室員より世界長大歴史の解剖学の成果認識と電子顕微鏡研究の発展を先導して頂いた。昭和五十二年夏に秋田大学に戻り、昭和五十四年七月に琉球大学医学部の教授に就任し、県の職員と共に沖縄本島と各島の市町村役所に行き、献体の大切さを説明し、献体者の葬儀に大学事務員と共に毎回参席致し、拝礼して受領致した。昭和五十八年五月二十五日、全国献体委員会会長であられた我が大学解剖学第二講座の山田致知教授の奮励により、世界で初めての「医学と歯学の教育の為の献体に関する法律」が定められた。昭和六十二年三月に山田致知教授が定年退職され、七月に後任教授に就任させて頂き、しらゆり会(昭和四十四年十月発足、平成九年四月からは金沢大学しらゆり会)の規則に従って業務遂行と解剖学教育・実習指導を行って来た。我が大学においては、明治二十年の第四高等学校校医学部からの大学墓地に六千名以上のお名前があり、家族が献体されている学生もおり、お花添えての謝恩解剖学実習を行い、業務担当の皆様のご尽力を学生に教えている。

毎年、十全同窓会に我が大学の世界

最々高の献体と行事・業務を報告させて頂き、ご支援を頂き、衷心より感謝致しておる。我が大学の高度歴史と先輩の偉大秀逸極まる人柄と才能を学生に教え、富貴人生と我が大学と日本国の開発・発展の才能進歩向上を指導致した。

# 退任の「」挨拶

## 感覚運動病態学分野(耳鼻咽喉科) 古川 俣



以前、本誌でも掲載されましたが、私は、昨年三月三十一日付で医学研究科教授(感覚運動病態学分野)を退任し、現在は金沢大学副学長(病院担当理事)、十全同窓会理事長として、母校の発展のために微力ながら日夜精励しています。

平成二年、梅田良三教授の後任として就任して以来約十九年間、金沢大学医学研究科教授として教育・研究・臨床に従事してきましたが、今年三月の退任記念講演を終えて初めて、退任を実感することができました。記念式で頂いたあなたのお言葉を糧に、第三の人生を生きていく所存です。想えば教務委員長、学部長として本学の医学教育改革に奔走したことや、山本博研究科長のもとで実現し

これまで私を育てて下さいました恩師、同僚、また学生の解剖学実習にご理解を下さいました、金沢大学しらゆり会の皆様、金沢大学十全同窓会の皆様から感謝致します。金沢大学の益々のご発展をお祈り致します。

た教授選考規定改正、立体駐車場建設などは、私にとっても大きな財産になりました。医学研究科並びに十全同窓会から頂いた、ご厚情に対して感謝の気持ちで一杯です。

学生諸君にも申し上げたいことがあります。正直なところ、失望の念を禁じ得ません。現在の初期臨床研修制度発足当時から、当該学生達の人ごとのような受け身の態度に、どこか違う国の話のような違和感を味わっていました。地域医療の危機、分野別医師不足問題が浮上し現制度の見直しが叫ばれている今日、もつと自分たちの意見を病院長や研修センター長へ積極的提言されてはいかげでしょうか。四十年前、インターン制度の廃止と研修登録医制をめぐって蜂起した私たちの頃とは明らかに時代背景が異なりますが、日本の将来医療を担う自分達の問題であることには変わりはないと思います。また、例年卒業生の全員があたりまえのように加入してきた同窓会です

受賞

松井 修博士 (昭和四十七年卒業)

経血管診療学 (放射線医学)

平成二十一年度文部科学大臣表彰科学技術賞 (研究部門) を受賞

が、今年に限って六〇%台であることは、にわかに信じていることができません。偉そうなことは言えませんが、母校に対する愛情はないのかと言いたくなります。加入は強制されるものでなく自由意思である以上、結果を非難することは不適切ですが、会員になることはそれほど意味のないことなのでしょう。これまで同窓会が本学に対して行ってきた事、今後果たすべき役割を再認識されることを切望します。

「伝統のない創造は盲目的であり、創造のない伝統は虚無的である」という、伝統と創造を本学と一緒に担ってきた同窓会の重みを今一度、考えていただきたいと思えます。

さて、金沢大学附属病院は、先端医療の開発と先進医療の実施、医療人養成、安全で安心な医療の提供など、常に北陸におけるリーダー的役割を果たしていく責任があると考えています。念願のP.E.T.C.T.サイクロトロンを整備した金沢先進医学センターは、来年二月頃には完成予定です。また、先端臨床医学教育研究棟は基本設計の段階に入りました。さらに二〇一二年には創立一五〇年を迎えます。限らない本学の発展と医学研究科のさらなる飛躍を期待いたしますとともに、皆様方のご健勝・ご多幸を心からお祈り申し上げます。

「肝細胞癌早期診断法と画像映像下治療法の研究」で受賞しました。私が医学部を卒業した昭和四十七年ころは、肝臓はほとんどの患者さんが一年以内で亡くなられるような状態でした。私はまず早期診断が重要と考え全身C.Tと血管造影を組み合わせた診断法を開発しました。この診断法は早期の肝細胞癌の診断と治療法の開発に大きな進歩をもたらしました。

た。私自身、これによって得られた知見をもとに肝臓に対する亜区域塞栓療法を開発し効果と安全性を著しく改善させることができました。こうした金沢大学附属病院発の技術や概念は、現在世界中で第一線肝臓診療に広く応用されています。一般にこうした新規の概念の提唱や治療技術の改善といった臨床研究は、いわゆる特許などの対象になるような具体

橋本 隆紀博士

脳情報病態学 (神経精神医学)

日本統合失調症研究会第三回研究助成 最優秀賞

統合失調症では、記憶・知覚・運動制御などの様々な認知機能の障害が、罹患者に共通して認められ、回復を妨げる要因になっています。その中でも、代表的なものが作業記憶 (情報を一時的に心に留めて行動や思考に利用する能力) の障害です。私は、作業記憶において中心的役割を果たす大脳皮質の背外側前頭前野を対象に、分子病理学的解析を行い、抑

制性伝達物質であるGABAを介した神経伝達の変化を報告してきました。受賞対象となった研究では、GABA伝達の変化を示す所見が、背外側前頭前野のみならず辺縁系・視覚野・運動野など、機能が異なる皮質領域にも存在し、作業記憶のみならず情動・知覚・運動制御などの障害にも寄与している可能性が高いことを示しました。最近、統合失調

的に目に見えるものではありません。そのため、それらが世界中に普及し多くの利益を患者さんにもたらしているも、なかなか評価を受けにくい点があります。こうした意味で今回の受賞を大変嬉しく思います。当然ですが、この結果は金沢大学病院で多くの同僚医師とともに携わった多数の肝臓患者さんの診療から得られたものであります。思い出深い多くの患者さんと、その診療に努力された多くの同僚に本賞を捧げたいと思います。また、故高島力、服部信、故小林健一、金子周一、中沼安二、各教授の長年の肝臓診療・研究に対するご支援に心から感謝します。

症患者において、GABA伝達の是正が、前頭前野皮質の活動パターンを正常化し、作業記憶を改善するという報告がなされましたが、GABA系を標的にした新規治療法が、様々な認知機能の改善をもたらす可能性があると考えられます。病態生理の解明には、病理学的所見が重要であることは、言うまでもありません。残念なことに、日本では、死後脳バングの整備が、諸外国と比べ遅れております。本研究も、脳バングを有する米国ピッツバーグ大学にて行われました。暖かいご理解とご支援をいただいた三邊教授を始めとする神経精神科の皆様方に、厚く御礼申し上げます。

## 「新外来診療棟の完成（新・金沢大学附属病院の完成）」の記念式典・祝賀会

この度「病院の顔」にあたる新外来診療棟が、平成十八年十一月から二年の歳月をかけて完成しました。これで十年間にわたって進められてきました新・金沢大学附属病院の建築が病棟、中央診療棟に続き全て完成したことになります。振り返ってみますと二十年以上も前に、一大プロジェクトとして「金沢城内にある金沢大学を角間に移転しよう」という方針が掲げられました時、当時の教授会では「金大附属病院だけは金沢市内に留まろう」と決議され、これに従って、平成七年に新・金沢大学附属病院の基本構想案が決まり、平成十年から工事が開始。まず新病棟が平成十三年に完成し、次いで新中央診療棟（手術部・検査部）が十七年に、そして今年（二十一年）ようやく「新外来診療棟」が完成、本年五月七日（木）から診療を開始したわけですね。



ホスピタルプロムナード（だれが命名されたのかシャレしています、が覚え難いのか、病院中央ロビーといっている人も多いようです）において盛大に行なわれました。来賓として徳永保・文部科学省高等教育局長、森喜朗・衆議院議員（元内閣総理大臣）、谷本正憲・石川県知事、山出保・金沢市長、飛田秀一・金大附属病院支援機構理事長ほか、県・市の行政、経済界、産業界、医師会・医療関係者、金大附属病院関連病院長など、本学内からは元学長、元病院長、元教授他、計約二百七十名の関係各位をお招きし、新外来診療棟や、古い現臨床（医局）研究棟を視察していただきました。また本学内の臨床・基礎の教授陣ほか、多くの先生



方、看護師他にも出席していただき誠にありがとうございました。

記念式典では、病院長としての式辞の後、学長より挨拶、続いて来賓の方々からご祝辞を賜った後、来賓並びに本院関係機関の方々による「くす玉開被」を行い、完成を祝いました。金色のくす玉が割れた瞬間、色とりどりの紙吹雪がキラキラと舞い降りてくるなか、新病院のスローガン「人間性豊かな医の心で、おもいやりの医療を」「最新設備のもとで、最高の医療を」の垂れ幕が現われた光景は、病院の明るい前途を約束しているような鮮やかな印象を与えたことと思います。

引き続き、ささやかな祝賀懇親会を催し、参加者同志の親交を温めました。次の懸案である新・臨床研究棟の早期建設への働きかけも水面下にしつかりと行なわれていたようです。

翌日には市民を対象に一般公開を行い、日本を代表する大学病院にふさわしい最新の姿を実感していただきました。

施設の概観としては、新病院の正面玄関に立つと、自然光を最大限に取り入れた吹き抜け構造のホスピタルプロムナードを前に、右手に新外来診療棟が、左手に新中央診療棟（救急部門・検査部門・手術部門）が、正面奥には新病棟がそびえ立つよう

に見透せます。このように全体が把握しやすい三位一体の診療体制が整い、我々にとっても患者さんにとっても、移動しやすく利便性が大いに向上したといえます。

新外来診療棟をもう少し詳しく述べますと、地上四階、地下一階建てで、延べ床面積が一万八千七百九十九平方メートルとなっています。地階には核医学診療科やリハビリ、臨床試験管理センターなど、一階は外科系部門、二階は内科系部門、三階に小児科、皮膚科をはじめ八つの診療科が配置されています。全科予約制としたことで各料がスペースを譲り合いながら、有効に使っていくこととなります。なお、四階には病院執行部、事務部門、看護部が配置してあります。また、病院側からの強いお願いにより、（財）済美会の大英断による多目的会議室「宝ホール」（三百人収容）をこの四階に寄付していただきました。今

後の病院の会議やセミナー、教育活動、憩いの場として大いに役立つと期待しています。全体として三階までの許可施設であったのをいろいろと折衝して捻出でき





第一回金沢大学未来開拓研究公開シンポジウム―医薬保健研究域の部は、平成二十一年一月二十四日(土)、石川県立音楽堂邦楽ホールにおいて約三三〇名の参加者のもと開催されました。冒頭、中村信一学長が「Features for the Future」と謳われましたように、このシ

### 第一回金沢大学未来開拓研究公開シンポジウム ―医薬保健研究域―「病気を予防するための食と運動と環境」

た四階建てですので贅沢はいえませんが、手狭な感じや不都合な点などに対する微修正にしばらく時間がかかることと思えます。  
それ以上に大きな課題が残っています。それは新外来診療棟の前に立ちほだかつている臨床研究棟の移転整備です。これを新外来診療棟の隣地に建設することにより、診療部門との移動アクセスの向上が望めると同時に、研究も活発になるものと大いに期待し、医学類とも知恵を集めている最中です。

もとより金沢大学附属病院は、最高の臨床・教育・研究の医療機関として、先進医療の発信地として、また難病治療の最後の砦として、さらには北陸三県の地域医療の支援機関として、その役割を果たして来ましたが、今後、新病院での活動を通して、より一層、北陸医療圏をリードしていきたいと思っています。皆様のこれまで以上の力強いご支援をお願い申し上げます。  
(富田 勝郎 記)

ンポジウムは、今年度新たにスタートした金沢大学の三つの学域・研究域がそれぞれどういう強みを持ち、何を目指しているかを内外にアピールするために行う事業です」とする趣旨の開会の御挨拶をされました。続いて山本博研究域長から、「本シンポジウムのテーマを、『病気を

を予防するための食と運動と環境』としたことについて、中国の唐の時代の医聖・孫思邈は『千金方』に『上医は未だ病まざるものの病を治し』とありますように、古来、予防は医学において最も尊ばれており、健康の実体や健康維持方法の解明も含め、予防の科学的基盤を立てることが現代医学に課せられた大命題であり、二十一世紀は予防

の時代』と呼ばれる由縁です。医学、薬学、保健学の三つの分野が融合し、連携する金沢大学医薬保健研究域の創設は正に時代のニーズに応えるものであり、医薬保健研究域は予防の科学を推進する拠点となるべきミッションとそれを実現しうる人的知的資源をもつと考えられます。本シンポジウムは、このような観点から企画されました」との御挨拶がありました。

セッションは、「予防するための環境」と題し、最初に金子周一教授から「肝代謝疾患を予防する」と題した講演があり、過剰なカロリー摂取は、肝臓を司令塔とする臓器間ネットワークを劇的に変化させ、二型糖尿病、高脂血症、炎症、動脈硬化の病態形成に関与する事実を示し、栄養学的な側面から予防の重要性が訴えられました。セッション二は、「予防するための早期発見」と題し早期発見のための診断学の重要性を中心に講演がすすめられ、「こどもの心の科学」と早期発見による疾病予防」を医学系の東田陽博教授が講演されましたが、昨今、ますます増え続けている「こどものこころのひずみ」の問題解決や、自閉症など広汎性障害の原因究明と対応・治療に新たな手がかりを与えるとの未来に夢のあるお話をなされました。

学内のセッションの後、厚生労働省の佐原康之医政局医療安全推進室長に、これらのセッションについて、行政の立場から発言を頂きましたが、佐原室長も、金沢大学医学部出身ということで、「予防」を第一回のシンポジウムで取り上げたことを大いに評価して頂きました。最後に、「スポーツと健康―気づき、

感動、行動」と題し、女子柔道の第一人者の山口香先生から特別講演を、「食育のすすめ―大切なものを失った日本人」と題して、料理評論家で御高名な服部幸應先生から特別講演を頂きました。本シンポジウムが第一回、二回、三回と積み上げられていくことを通じまして、今、生きている人だけではなく、未来の人々のための最高水準の医学が提供できる「地域と世界に開かれた教育重視の研究大学」としての金沢大学の使命がその趣旨に込められたシンポジウムの幕開けだったと思います。(中村 裕之 記)

## 同窓会名簿

### 本年12月初旬刊行予定

平成20年度、21年度会費納入の方に発送致します。

本号に会費払込用紙を同封いたしております。

## 論説

## 卒後研修の現状と将来

金沢大学卒後臨床研修センター長 吉崎 智一

新臨床研修制度が発足して五年が経過しました。本制度は、医師としての最初の二年間に必須科目と選択科目をバランスよく研修して、診療能力の土台が広い医師を育成し、そのうえに、自分の専門領域をつみあげてゆくという、イメージとしては富士山のような医師の育成が謳い文句でした。しかし、初期研修医は大学を離れ一般病院に集中する結果となりました。大学離れの加速により、派遣を打ち切られた地域の病院は、診療所の閉鎖や診療規模の縮小などを余儀なくされました。金沢大学でもこの二年は持ち直したものの最初の三年間は研修医が減少の一途をたどりました。そして、本制度は地域医療崩壊の責務を負わされて、評価を受ける以前に大きな変革を迎えることとなりました。では、今後の臨床研修制度のあり方について二十一年二月三月の医道審議会医師分科会医師臨床研修部会においてどのような意見が取りまとめられたのでしょうか。意見を要約すると以下のごとくになります。

## 臨床研修制度導入以降の状況

- 一、各病院が特色のある研修を展開したために、研修プログラム基準の見直しが必要
- 二、多くの診療科での研修を一律に課すことが、研修医のモチベーションを損なう面がある
- 三、医学部教育改革の動向と臨床研修制度が十分に連動しておらず調整が必要

- 四、受け入れ病院の指導体制などに格差が生じてきており、臨床研修の質の層の向上が必要
- 五、大病院の医師派遣機能が低下し、地域に置ける医師不足問題が顕在化
- 六、募集定員の総数が研修希望者の一・三倍を超える規模まで拡大し、研修医が都会に集中

- 一、研修医の将来へのキャリアへの円滑な接続が図られるよう、研修プログラムを弾力化
- 二、卒前卒後の一貫した医師養成を目指し、研修の質の向上や学部教育の充実を図る
- 三、医師の地域偏在対応、大学等の医師派遣機能強化、研修の質向上の観点から募集定員を見直す
- 四、見直しの方向性としては、

## 一、研修プログラム弾力化

- 必修診療科は内科六か月以上、救急三か月以上、そして、二年目に地域医療研修を一月以上となります。そして、外科、麻酔科、小児科、産婦人科、精神科の中から二科目が選択必修となります。すなわち、石川県のみならず北陸で医師数の減少が話題となっっている外科や麻酔科が必修診療科からはず

れることとなります。これを受けて、金沢大学卒後臨床研修センターでは外科系を志す学生を対象として、二年目の研修はすべて専攻科において行う外科系重点プログラムを作成しました。また、小児科、産婦人科重点プログラムも作成した。もちろん、これまでのような多くの科を巡回する研修も引き続き実施可能ですし、大学のみ二年間の研修も大学一年協力病院一年の「たすぎがけ」研修も可能です。

## 二、募集定員や受け入れ病院のあり方

都道府県別の募集定員の上限を設定することとなり、都市部の定員が減少されました。北陸ではおおよそ石川二百人、富山と福井は百人ずつと、石川県には医科大学が二校あることと金沢大学の北陸における医師派遣機能を考慮しただけのものを受け取れます。そして、各病院の募集定員は、研修医の受け入れ実績等をふまえ、医師派遣実績も勘案して設定することとなり、金沢大学はこれまでの一学年約四十人から、六十人前後へ募集定員の増加を図ります。

## 三、関連する制度の見直し

これは医学部教育においてもっと臨床実習を取り入れて、研修内容の前倒しを意図したものと思われれます。地域に於ける医師不足解消対策として医学部入学に関して地域枠の拡大の促進など、本研修制度と直接関連が薄い事項が盛り込まれていることは、大病院を地域医療の中核を担う存在として、行政と連携して計画的な診療システムを目指していることがうかがえます。この制度は五年をめどに見直しを検討する予定です。

以上述べてきたように、卒後臨床研

修制度の見直しは、医師としての能力向上への貢献度が低いために見直しとなったのではなく、地域医師不足解消のために巻き起こった議論です。これまで逼迫していた医療情勢を改革せずに果たして研修制度周辺の改革で、どこまで医療環境が変化するかは疑問です。しかし、厚労省の医局つぶしが失敗に終わり、現在一時的かもしれないませんが、厚生労働省と文部科学省が一貫して医師養成を考えるようになったことは歓迎すべきと思います。地域医療崩壊はメディアを通じても報道されているため注目を集めています。しかし、もっと深刻な人材不足が基礎医学でおこっていることは見逃されがちです。今回の見直しにおいても触れられていません。もちろん、制度の変革に伴い、金沢大学独自の魅力的なプログラムを作成する必要があります。しかし、そのほかに、決して待遇の良くない大病院に研修医をつなぎ止めておくために、大きく二つのことが大切であると考えます。ひとつは、大学でのキャリアアップの方が、安易に一般病院に流れるよりも明るい将来像があることを知ってもらうこと、もう一つは、学生時代に培った人間関係、大学および金沢という土地に対する愛着を持ってもらうことです。人付き合いが苦手な個人主義というレッテルが現在の若手医師に貼られがちですが、それは、我々の世代と彼らのコミュニティケーション手段が若干異なるだけです。我々は、今後も移ろい行く研修制度に必要以上に振り回されることなく、人間として尊敬できる、親しみやすい医師像を学生にも研修医にも見せ続けること、そして、こちらの方から声をかけ続けることが大切であると感じています。





今回の十全学術行脚は信州大学大学院医学研究科を訪ね、森泉哲次教授（人体構造学講座）、角谷眞澄教授（画像医学講座）、田中榮司教授（内科学講座第二）、および宮川眞一教授（外科学講座第一）の四先生方から大学の現状や研究の一端についてお聞きしました。



森泉哲次 教授

桜の開花間もない四月二日に久しぶりに松本駅にお立ち、まつす

ぐに信州大学医学部に向かいました。本学と同様に、ちょうど臨床研究棟の改築の真最中でした。まず、基礎校舎の森泉哲次教授（本学昭和五十二年卒業）のお部屋をノックしました。先生は平成七年に当時の本学第三解剖学教室より信州大学医学部解剖学第二講座の教授に赴任されて今年が十四年目だそうです。丁度、松本サリン事件の翌年、地下鉄サリン事件直後の不安を持つての赴任だったそうです。松本サリン事件では信州大学医学部の女子学生がお一人犠牲になったことは我々の記憶にも残っています。こちらでの担当課目は肉眼解剖学だそうで赴任一年目は実験や研究を一切やめ肉眼解剖学の教育に専念されたことを聞き、改め



角谷眞澄 教授

次に、角谷眞澄教授（本学五十二年卒業）からお話しをお聞きしま

て先生の教育に対する真摯な取り組みに感服しました。また、その陰に山田致知先生（故人 本学名誉教授）のテキストが随分と役に立ったという話をお聞きしました。先生の研究テーマは嗅覚系の構造と機能、神経幹細胞の動態、神経機能と神経細胞数の相関、哺乳を制御する神経系などです。中でも先生が熱く語られたのは哺乳の制御系で、新生児マウスの正確な体重測定や排泄物の量測定や口腔周囲や舌の支配する神経系の剖出とその切除など当時の苦勞の一端でした。現在は新生児ラットでの脳内伝導路の自然再生と成熟ラットでの脳内伝導路の再生誘導に取り組んでおられるそうです。毎日、動物施設に行つてラットの顔を見るのが楽しみだそうです。またお弟子さんにも恵まれ、二人の信大医学部出身のスタッフと共に頑張つておられることを目を細めて話されたのが印象的でした。

した。先生は卒業後すぐに故 高島力名誉教授が主宰しておられた金大放射線医学教室に入局され、二年間の研修に出

れた福井の済生会病院での経験から腹部放射線診断学を専攻され、松井修現教授に師事されました。昭和六十一年にMRI技術を習得するために米国デューク大学に留学され、以来二十年にわたりMRIの臨床応用研究をメインテーマに取り組んでおられます。

平成十二年十一月に信州大学医学部放射線医学講座の教授として赴任されました。同窓生の皆様であればご存知ですが、前々任の故 小林敏雄教授（本学十九年度卒業）は金大放射線科の同門であり、その小林先生を慕つて信州に就職



した放射線技師数名が暖かく迎えてくれたことが嬉しかったそうです。また医局に本学出身の藤永康成先生と上田和彦先生が加わってくれ、教室を引っ張つてくれていること、そのお陰で二十名を超す教室員に恵まれているそうです。

先生は放射線診断、核医学、IVR、放射線治療を準備範囲として放射線医学のレベルアップ、臨床研究の実践、教育の徹底を図り教室員を牽引し精度の高い診断、治療の確立を目指されています。また最新の診断機器の導入はもとより、画像のデジタル化に加え、読影環境を整備しフィルムレス化、電子カルテ化を押し進められました。また病院長補佐として新外来棟の建設に取り組まれ、病院経営の中核を担つていらつしやいます。また、遠隔画像診断により、広大な長野県における放射線医学の普及と水準化にも力を注いでおられます。ところで先生は能登の門前町のご出身だそうで、赴任当初はあまりなじめなかつたそうですが、今では北アルプスを始め自然の美しさに、「信州松本」での生活を心から楽しまれている様子でした。



田中榮司 教授

次に田中榮司教授（本学五十三年卒業）からお話しをお聞きしまし

た。先生は卒業後すぐに信州大学大学院に入局され、消化器病とくに肝臓病学を学ばれました。自治医科大学や米国立衛生研究所に留学され、留学先での肝炎の研究が先生のライフワークになられた

ということですが。また長野ならではの経験として一九九八年に長野県で開催された冬季オリンピックの選手村総合診療所の副所長をされ、貴重な体験や楽しい思い出を作られたことを話されました。昨年一月より内科学第二講座の教授となられました。診療科としては消化器内科、腎臓内科、血液内科を担当され、大世帯の医局を切り盛りされています。各診療科の特色を生かし質の高い医療を目指されています。病院の中ではいわゆる繁忙度の高い診療科に属しますが、明るく、忙しい中にも達成感のある診療科づくりに力を注いでおられる様子が伝わってきました。

消化器科は高度な専門医療を目指し、胃腸、胆膵、肝臓に分けられています。腎臓は腎炎の診断を中心に血液浄化療法や腎移植も視野に入れた診療を実施されています。血液は骨髄移植を含めた総合的な診療を行っていらつしやるそうです。患者さんに良質の医療を提供し医療環境を整備し、誇りと責任感を持った専門医を育てることを第一に考え、日夜若い医局員と共に先頭に立って頑張っておられます。先生自身の研究は、肝臓病学が専門でこれは前任教授、前任教授からの流れを引き継がれ、研究の中心はB型肝炎とC型肝炎ですが、自己免疫性肝炎や癌、脂肪性肝炎にも興味をお持ちだそうです。肝臓の診療には本学出身の放射線医学、外科学第一講座と共同した集学的治療も行われています。また昨年からは長野県肝疾患診療拠点病院に指定され、肝炎診療ネットワークを立ち上げ肝炎疾患相談を運営するなど地域医療にも貢献されています。



宮川眞一 教授

次に宮川眞一教授（本学昭和五十七年卒業）をご紹介します。あ

いにく外科学会へのご出席のためご不在で直接お目にかかれなかったのは残念でした。そこで先生からのメッセージを誌上をかりてご報告させていただきます。先生は卒業後すぐに信州大学医学部第一外科教室に入局され、六年前の平成十五年に教授に就任されています。肝・胆・膵領域の癌と肝移植を中心に臨床基礎研究が専門です。二〇〇〇年代に入ってから医療訴訟の増加や二〇〇四年から始まった初期臨床

研修の義務化以来、地方大学に若い医師が残らなくなりました。特に外科系は三K、五Kと言われ敬遠され医師数が激減しています。これが医師の大都市偏在、地方医療の崩壊、特定診療科への偏在につながっています。さらに重要なことはこの臨床研修制度は医師キャリア形成を一切担保していないことです。わずか数ヶ月指定診療科を研修し、二年間たてば自然に一人前の医師が育つと考えたのでしょうか。これによって本来大学病院が担ってきた医師のキャリア形成や地域医療施設への医師派遣システムの両方を崩壊させ、今日の大きな医療問題の原因となっていることです。

このような逆風の中で、いかに外科希望者を確保し、育てていくかが大学病院に課された最も重要な問題です。大学に在籍する魅力の一つに海外留学があると思いますが、教室からも現在、英国、米国、カナダにポスドクで四名留学しており、肝・胆・膵領域癌の発癌と治療、ES細胞を用いた肝構築、膵島細胞移植に関する研究を進めております。分子生物学的手法を駆使した最先端の研究は大学

の教室として取り組むべき課題でありま

す。しかし、外科の魅力とは、やはり手術をもって患者を治療しえるという点に尽きると思います。外科系の学会においては手術手技に関するビデオ発表には、いつの時代も外科医が多く集まります。一昔前は生体肝移植に関するビデオ発表に、今や腹腔鏡下手術に関するビデオ発表の会場に、入りきれないほどの外科医が集まっております。地方大学の医学部外科教室にとっては苦難の時代ですが、大学本来の魅力である最先端の研究環境に加え、メスを持つて病を治療する、という外科の原点に立ち返り、新しい手術手技・治療法の開発に邁進する必要を改めて感じている次第です。

（加藤 聖 記）

### 名簿改訂についてお願い

編集委員会では、各卒業年度からの協力者を中心として複数の方に住所変更の校正作業をお願いし、遺漏のないように努力いたします。何分多数、多岐に亘る作業ですので御協力の程宜しくお願い致します。

なお、改訂版の発送は十二月初旬を予定致しております。

### 病院紹介

## 芳珠記念病院

### ■能美市の紹介

私ども、医療法人社団 和楽仁(わらに) 芳珠記念病院は、石川県能美市の旧辰口町の丘の上に位置しております。能美市は、ご存知のとおり、大リーグ松井秀喜選手や森喜朗元首相の出身地で、九谷焼でも有名な市です。産業面では、手取川の伏流水などの自然環境を活かして、世界的な大手企業だけでなく数多くのグローバルニッチ企業が立地し、近くには北陸先端科学技術大学院大学 (AST) があります。また、辰口温泉、いしかわ動物園や辰口丘陵公園など、豊富な観光資源も有しており、住み良い街として全国の上位に選ばれています。

このような特色もあり、五万人弱ながらも人口は増加傾向にあり、高齢化率は石川県の平均より低くなっています。子供たちや働き盛りの方への啓発を含めた予防事業、そして高齢化に対応する介護事業など、医療以外にも、地域の健康を支えるために、幅広い対応が必要と考えています。

### ■当院の取り組み

当院の前身は、一九二七年に仲井眼科医院として小松市に誕生しました。その後、一九六二年に仲井外科病院となり、消化器センターの開設やベッドの増床なども計画しましたが、旧辰口町からの病院開設の熱い要望を受け、一九八三年、

今の地に「辰口芳珠記念病院」を設立しました。そして、二〇〇五年の市町村合併で能美市が誕生するとともに、現在の「芳珠記念病院」に名称を変更しました。医療事業における私どもの役割は、「地域密着型病院(かかりつけ病院)」と「拠点型病院(基幹的病院)」の二つの側面があると考えています。一般病床二百床、療養病床百二十床のいわゆるケアミックス型で、周辺に医療機関が多くないこともあり、精神科を除く総合病院としての各診療科と、外来化学療法センターや生活習慣病センターなどの様々なセンターを構え、地域のニーズにできるだけ広く深く対応できる体制をとっています。二〇〇八年には、DPC対象病院になりましたが、早くから体制を構築できたことで、順調に成果をあげています。また、四疾病五事業では、南加賀エリアにおける、消化器がんを中心とする傷の小さな手術と化学療法、クリーンルームでの造血管腫瘍の治療に力を入れています。さらに高血圧症の10%を占める原発性アルドステロン症の診療では、金沢大学やASTと連携し、機能の拡充と地域啓発を進めています。

予防事業は、健診センターでの健診業務だけではなく、ほうじゅ連携室を中心に、地域の健康イベント等に参加し、「顔が見える」啓発活動を大切に行っています。また、介護事業では、介護療養型医療施設の他に、本年四月に、関連会社(株)グリーンケア芳珠が、小規模多機能型介護施設「コミニケア緑が丘」を、病院の隣接地に開設しました。本格的な在宅介護サービスとの連携を、今後ますます強化してまいります。



### ■病院MOT改革

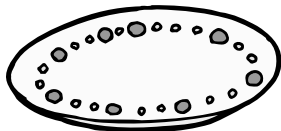
医療制度は、量的拡大の時代から医療費急増の時代、そして医療費抑制の時代へと、絶え間なく大きく変化してきました。そのような環境で、常に新しい事業を行い、病院経営を継続して改革していくために、当院では、JASTの知識科学研究科の近藤修司客員教授と共同研究で、「病院MOT改革」を導入しています。

MOT改革とは、技術経営とも訳され、「極めた技術で何を創り、どのようなシナリオで経営し、社会に役立つか？」に発想を転換することから始まります。二〇〇四年に就任した仲井雄理理事長がこの改革の先頭に立ち、職員と一緒に実践することで、着実に成果をあげてきています。

### ■和楽仁の心

「私たちは、地域の健康を支える医療法人として、和やかに(〓和)、楽しく(〓楽)、働きたいを持ち、利用される皆様に対しては、思いやりと保健・医療・介護を統合した良いサービスを提供(〓仁)します。」これが、私たちのモットー「和楽仁」です。そして、モットーをそのまま医療法人の名称にしていることは、私どもの大きな特徴だと思います。地域の皆様のために、本当に必要なとされるものをいつでもご提供する。皆様との心のふれあいを大切に、自ら改革しながら、理想を追い続ける。「和楽仁」には、こんな思いがこもっています。

(院長 上田 博 記)



病院紹介

富山県済生会高岡病院

沿革

昭和十年四月に富山市に開設された、恩賜財団済生会富山病院が、二十年八月に戦災により焼失したため、二十年十一月に高岡市末広町に移転し済生会富山病院として診療を開始したが、当院の始まりで、二十三年三月に富山県済生会高岡病院に改称されました。

当初は二十床でしたが、外科、理学療法科、整形外科、放射線科の開設や、増床の繰り返して、五十七年には、病床数は二百十八床となり、平成六年一月には、高岡駅前から、駅の南側の現在の地（高岡市二塚）に新築した新病院に移転し、病床数も五十二床増床し、二百七十床となりました。同時に耳鼻咽喉科、泌尿器科、皮膚科を新設し総合病院となりました。その後、麻酔科、リウマチセンター、循環器科、救急センター、腎透析センター、ドック検診センターなどを新設し、現在に至っています。救急も高岡地区医療圏の中核病院の一つとして、高岡地区医療圏における二次救急輸番病院として年間九十六日間を受け持っています。このほか、平成十五年に臨床研修指定病院となり、十七年七月から、電子カルテシステムを本稼働し、十七年八月にはWHO・ユニセフによる「赤ちゃんにやさしい病院」の認定を受け、同時に母子支援センターを開設し、十九年五月には助産師外来も開設しました。また、

二十年七月からDPC対象病院となつています。

現在、許可病床数 一般二百七十床、診療科目十六科 医師四十名で診療にあつています。また、現在十対一となつている看護配置基準を七対一看護体制（本年七月以降を目標）にするよう準備をすすめているところです。



当院の特色と取り組み

当院の特色として、整形外科の症例数の多さがあげられます。特に、膝関節手術、脊椎の内視鏡手術は高い評価をうけており、この強みを今後も生かしていきたいと考えています。

さらに、本院には、内視鏡認定医とし

て、既述の日本整形外科学会脊椎内視鏡手術技術認定医のほかに、日本内視鏡外科学会技術認定医が二名おり、これも本院の強みと考えています。

また、がん診療連携拠点病院の指定に向け、十九年八月に高岡在宅・緩和医療懇話会を立ち上げ、二十年には緩和ケアチームを発足し、緩和ケア外来も開設しました。そして、緩和ケアチームの介入症例は三月の時点で、六十症例以上になっています。Cancer Boardも二十年四月に一回目をおこない、その後毎月開催しています。さらに、二十年六月には外来化学療法センターを新設するなど着々と準備をすすめてきました。本年の、がん相談支援室の設置、院内がん登録の実施で、指定要件を満たせると思っています。

高岡在宅・緩和医療懇話会は、診療所の医師だけでなく、訪問看護師、ケアマネージャー、薬剤師（薬局）などと一緒にとなり連携、協力し、患者さんや家族に安心して、在宅医療を受けてもらうのを目的としています。当院としての役割は、疼痛コントロールを含む緩和ケアチームの介入や急変時のサポートなどです。急変時のサポートは、二十四時間体制で臨んでいます。そして、この取り組みは、地域との連携を深める意味でも、効果のあるものと考えています。

当院の基本方針の一番に、「患者さんと職員がともに満足する質の高いチーム医療をめざします」をあげています。医療知識や医療技術の習得とともに、医療安全、コミュニケーション力、接遇なども医療の質と重要な要素ととらえ、これらの向上に取り組んでいます。これが、

患者さんに満足していただける良質な医療の提供につながり、地域に信頼される病院づくりにもなると考えています。  
(院長 北川 和久 記)

悪質な電話にご注意下さい

ここ数年、同窓会の名前や事務局員の名前を語り、会員の住所を聞きだすケースが増えています。不審な場合は即答をお控えいただき、必ず事務局までお電話の上、ご確認下さいますようお願い致します。

十全同窓会事務局 電話：076-265-2132

## 教室だより

### 機能回復学

#### (麻酔・蘇生学)

本教室は一九六六年に村上誠一、逸見稔が助教授に任命されて開講し、一九七八年には村上誠一先生が教授に任命された。以来、北陸を中心に百名以上の麻酔科医を輩出してきている。麻酔科医の活動範囲は手術麻酔に始まり、集中治療、救急医療、ペインクリニック、緩和医療へと拡がり、二〇〇〇年には救急・集中治療部門が救急医学講座(血管情報発信学)に移管された。二〇〇二年八月には山本健が第四代の麻酔・蘇生学講座教授に就任し、手術麻酔・緩和医療を中心に臨床、研究をおこなっている。金沢大学の三学域編成に伴い二〇〇八年四月より医薬保健研究域医学系(麻酔・蘇生学)となっている。



#### 【研究】

- 一、薬物動態学に関する研究…近年、吸入麻酔法に代わって覚醒の質が高いとされる静脈麻酔法が用いられる機会が増えている。われわれの教室は以前より静脈麻酔薬の薬物動態に関する一連の研究をおこなってきた。現在では、これらの研究成果に基づきコンピュータシミュレーションにより静脈麻酔薬の血中および脳内濃度を計算・表示するソフトウェアの開発をおこなっている。
- 二、中枢神経機能に関する研究…脳老化・神経病態学(神経内科学)、脳情報病態学(神経精神医学)とともに、石川県知的クラスター創成事業の一つである認知症早期診断プロトコルの作成に携わっている。また、脳磁図、fMRI、ZRSなどの先進的な脳機能評価方法を利用して、痛みの認知機構、定量化に関する研究に取り組んでいる。
- 三、脊髄虚血の診断、治療に関する研究…手術中の脊髄虚血は対麻痺となり深刻な後遺症を残すこととなる。脊髄機能モニターとして小脳誘発電位、運動誘発電位周波数分析の有用性を、また治療法としてポストコンディショニングの有効性に関する検討をおこなっている。
- 四、ショックの治療方法に関する研究…救急医学講座と共同で様々なショックに対する治療法の研究をおこなっている。これまでに敗血症性ショックに対する静脈麻酔薬やサイトカイン吸着カラムの有用性を報告してきた。現在では新たなショックモデルとして大量出血モデル、気道閉塞モデル、食道ペーシングによる心室細動モデルなどを作

成し、それぞれの病態に応じた救命方法の検討をおこなっている。

- 五、筋弛緩薬に関する研究…筋弛緩薬の作用が残存することは、患者の安全を脅かすことになる。特に神経筋疾患患者では筋弛緩薬に対する感受性が亢進あるいは低下するため、個々の疾患に関するデータを蓄積し、投与方法、モニター方法を検討している。

#### 【臨床】

##### 一、手術麻酔

金沢大学では、年間約五千件の手術がおこなわれ、そのうち局所麻酔を除くほぼすべての症例の麻酔管理を担当している(約三五〇〇例)。二〇〇五年九月には新手術室が稼動した。ここではモニター情報と麻酔記録は電子化・統合され、過去の麻酔記録も簡単に呼び出すことができる。また、三台の経食道エコー装置、脳血流計、脳酸素飽和度モニター、誘発電位測定器を高リスク患者の麻酔を中心に活用している。

##### 二、緩和医療

石川県がん診療連携拠点病院の指定に伴い、二〇〇六年に麻酔科医、精神科医、がん性疼痛看護認定看護師、薬剤師からなる緩和ケアチームが発足した。それぞれの専門性を活かし、院内のがん患者の身体的、精神的苦痛に対して直接的な治療とカウンセリングをおこなっている。また、二〇〇九年から県内のがん診療に携わる医師を対象として、緩和ケア研修会を企画・運営している。

#### 【教育】

##### 一、学生教育

医学類四年生に対する「事故・中

毒」の講義を担当している。五年生対象のベッドサイドローニングでは、医学生が臨床麻酔手技・手順を見学するだけではなく、麻酔科医の考え方が理解できるように予習・実習・復習の三ステップ研修をおこなっている。六年生対象のクリニカル・クラークシップでは、患者さんのインフォームド・コンセントを得た上で点滴や挿管の実習をおこなっている。

##### 二、初期臨床研修

平成二十一年度までの初期臨床研修では、救急・麻酔が必修科目となっている。点滴、気管挿管、腰椎穿刺手技の代用としての脊髄くも膜下ブロック、胃管挿入などの初期臨床研修の必修手技を経験することはもちろん、ミニレクチャー、抄読会、症例検討会などで全身管理学としての麻酔科学を学べるようになっていく。

##### 三、救急救命士気管挿管研修

石川県内(主に奥能登地区)の救急救命士を対象として気管挿管実習を受け入れ、地域の救急医療で活躍できる人材育成に協力している。

金沢大学附属病院の手術件数は、社会の高齢化と医療構造の変化のため年々増加している。また、手術・麻酔技術の発達と共に以前なら「手術が難しい」と判断されたような高リスクの患者さんも手術を受けられるようになってきており、麻酔科医の数と質への要求は高まっている。また、「ペインクリニックや緩和医療でも「痛みのスペシャリスト」としての需要は多い。そのようなニーズに応えられるよう、教室の活性化を図っていきたい。

(坪川 恒久 記)

## 教室だより

## 脳情報分子学

## (分子神経情報学)

平成四年に、前任者根岸晃六名教授の後任として加藤が教室を主宰して早や十七年の年月が経過しました。その間、大学院重点化、大学法人化の大きな流れの中で神経情報研究施設情報伝達部門から、分子神経情報学講座、脳情報分子学分野と二度の教室名変更を経て、現在に至っています。この間に、講師一名、助手一名の移動がありました。研究室は教員三名、事務系職員二名の合計五名の職員と修士学生を中心とした大学院生から成っています。修士学生は広く薬学部、保健学科、工学部等から常時八、十名が出入りしています。三名の教員、加藤、松川通講師、郡山恵樹助教で教育担当として医学科二年生の生理学の一部「感覚生理学」を担当し、視覚、聴覚、



嗅覚、味覚、体性感覚の講義を行なっています。その他大学院博士課程の初學者ゼミの一部を担当しています。また修士課程の選択課目の「情報学概論」などを担当しています。

次に研究面の内容を紹介すると、網膜を扱っていることは前任者からの教室の伝統ですが、教室名の変更に伴ない、内容やアプローチの仕方が従来の生理学的、形態学的研究から、生化学、分子細胞生物学的研究に変わってきています。つまり、前任者から引き継いだ「網膜の情報処理過程の解明」という網膜内の神経伝達の仕組みや、伝達物質の局在を調べるというテーマから、現在の研究テーマは「中枢神経の再生」に変わりました。脳外傷、脊髄損傷や視神経障害といった中枢神経に損傷を受けると麻痺や失明といった重篤な後遺症をもたらす。一方、ヒトと異なり、魚類の脊髄や視神経は切断されても、完全に修復再生し、数ヶ月後には何事もなかった様に動き廻ります。この魚類の神経再生に関わる分子を同定しその再生への関与を生化学的、生理学的に精査し、再生の困難な哺乳類の神経再生に応用しようという全く新しいコンセプトで日夜研鑽を積んでいます。魚から抽出してきた再生分子の一部は確実に成熟ラットの視神経の軸索伸長を誘導することが分かりました。

具体的な研究テーマを二、三列記すると以下の通りです。

一、**網膜神経節細胞に対する生存促進効果**  
ラット眼球に興奮性アミノ酸NMDAを投与すると一週間程で神経節細胞を含んだ網膜内層が変性脱落する。また、ラットの視神経を損傷すると同じく一週

間以内に神経節細胞がアポトーシスに陥り脱落します。これらのモデルに対してその細胞死を抑制する分子を見つけました。例えばDCC、プルリン、トランスグルタミネースなど金魚の視神経再生に関与する分子はすべてリン酸化DCCやDCCといった分子の発現を増加させ、細胞生存に働き細胞死を著明に抑制しました。これらの研究は郡山恵樹助教を中心として展開され新規な神経保護作用を持つ分子が発見されています。

二、**視神経軸索に対する伸長促進効果**

上記の再生分子を成熟ラット網膜に対してDCC(培養下)およびDCC(直接眼球投与やウィルスベクターによる投与)いずれにおいても視神経の中枢側への伸長を促進しました。このことはDCCの視神経の損傷側から中枢側への伸長を意味し、上丘への逆行性レーザーの注入による網膜神経節細胞のラベル数の増加により確かめられました。緑内障は視神経の障害(その原因としては、眼圧の上昇、グルタミン酸神経毒性、虚血、酸化ストレスなど多岐にわたる)により起こる慢性的神経節細胞の変性症であり近年患者数の増加が目立っています。これらの実験から神経保護さらには軸索伸長の両方を併せもつ積極的かつ信頼性の高い抗緑内障薬の開発を目指しています。有望な創薬開発につながるものと期待されています。これらの研究は、郡山助教を中心に院生との共同で行なっています。

三、**魚類の視神経再生分子の探索**

正常網膜と視神経切断網膜のディスプレイから視神経再生時に発現が上昇する分子をクローニングし、再生時期

別にそれら分子の働きを同定し、更にゼブラフィッシュ胚を使ってこれら再生分子の遺伝子ノックダウン魚を作製し機能解析を行なっています。その結果、再生分子の一部が網膜発生にも大きく関わり、細胞分化や網膜形成に重要な役割を果たしていることが判明しています。また、プロモーター解析から再生分子の発現上昇のシグナル制御分子の発見についてもトランスジェニニック魚を使い転写レベルで検索を押し進めています。これらの研究は松川講師や永島幹子学振特別研究員により展開されています。

四、**動物行動の自動定量装置の開発**

本学工学部との共同研究により、小動物ラット、マウスやゼブラフィッシュなどの行動をCCDカメラよりコンピュータに取り込み、その画像を処理することで動物の二次元、三次元的な動きを軌跡として図示し、そのデータを基に動物の行動(特に視覚依存性行動)を定量化し再生の回復過程や発生過程における視覚機能の評価に利用しています。特にゼブラフィッシュの行動を三次元的にリアルタイムで表記する装置を開発し、異常ミュータントの特定や発生行動学、脳の高次機能の解明などの幅広い分野に応用しています。この研究は加藤を中心に院生との共同で行なっています。

以上私共の研究の一端を紹介しましたが、従来、不可能とされてきた難治性の中枢神経障害に対して、成果は微々たるものですが、「中枢神経再生」という大きな夢に向かって教室員一同頑張っています。同窓会員の皆様方にも今後益々の御支援を賜ります様お願い申し上げます。(加藤 聖 記)

### 支部だより

## 三重支部

平成二十一年度十全同窓会三重支部会

総会は、平成二十一年二月八日(日)に津市内で行われました。本年度総会には十二人の会員が出席しました。

総会では三重支部長の水本龍二先生から挨拶があった後、昭和二十一年卒の生駒一徹先生の米寿のお祝いを行いました。今年度から平成十七年卒の春木祐司先生が新しく会員に加わりました。平成二十一年度時点で、三重支部会員は二十七名です。

その後、懇親会に移りました。懇親会も和やかな雰囲気うちに終わり、閉会となりました。(山門 亨一郎 記)



後列左から…中瀬玲子(昭和六十三年卒業)、伊藤敏秋(昭和五十二年卒業)、森一満(昭和五十一年卒業)、山門亨一郎(昭和六十二年卒業)、祖父江直久(昭和五十一年卒業)、大石晃嗣(昭和六十三年卒業)。

前列左から…野口孝(特別会員)、春木祐司(平成十七年卒業)、水本龍二(昭和三十年卒業)(支部長)、生駒一徹(昭和二十一年卒業)、棟方宏次(昭和三十年卒業)、原田資(昭和四十六年卒業)。

## ポストン支部

平成二十一年二月二十八日、十全同窓会ポストン支部会を米国マサチューセッツ州ポストン市シーポートにあるレストランAnthony's Pier 4で開催しました。

このレストランはポストンハーバーを見渡せる景色の良い場所にあり、米国歴代大統領などの政治家や著名人も訪れることで知られ、そのロビーには数々の記念写真が展示されています。その中にはポストンレッドソックスの松坂大輔投手や独身時代の皇太子殿下の写真もあります。ここポストンは、ハーバード大学、マサチューセッツ工科大学、ポストン大学や、タフツ大学をはじめとする七十以上の総合大学や単科大学があり世界中から数多くの留学生が集う学園都市でもあります。今回のポストン支部会はポストン在住および留学中の十全同窓会会員の相互の親睦を深めることは勿論のこと、将来の留学・来訪者となりうる金沢大学在學生、同窓会会員の方々とこのネットワーク構築あるいは強化の新拠点とし

て新たに再結成したものです。さらに医学部出身同窓会員以外にも他学部例えば薬学出身の金沢大学卒業生もこの地で活躍されていることから、将来十全同窓会ポストン支部を核として広く金沢大学同窓会ポストン支部へと発展することを見据えての支部会開催となりました。まず開会に先立ち本支部支部長をハーバード大学眼科教授広瀬竜夫先生にお願いすることになりました。そして今回は金沢からハーバード大学・タフツ大学訪問視察中の山本博医学保健学域長にもご参加いただき総勢十名の盛会となりました。会の冒頭、山本学域長より金沢大学の近況をご報告していただいた後、広瀬支部長の乾杯の音頭で会が進行しました。広瀬先生御自身の米国留学時に、金沢の先輩医師から「頑張らなくともよい。とにかく身体を大事にするように。」と送り出されたその言葉が留学中を通して心の支えとなったという逸話を披露していただき、日々異国の地で緊張している留学生の心もほぐれ、和やかに情報交換、歓談の場となりました。そして参加者一同ニューイングランド地方の冬のシーフードを堪能しました。今回の参加支部会員は次の方々です。広瀬竜夫(昭和三十六年卒業・支部長・Boston Eye Group)、山本靖彦(平成四年卒業・幹事・Joslin Diabetes Center)、吉田敦(平成六年卒業・Brigham Women's Hospital)、高倉あゆみ(平成七年薬学卒業・Brigham Women's Hospital)、山本圭子(平成八年卒業)、岩田恭宜(平成九年卒業・Brigham Women's Hospital)、今野哲雄(平成十年卒業・Harvard Medical School)、萩原章

(平成十三年卒業・Massachusetts Eye and Ear Infirmary)(敬称略)。尚、今回のポストン支部の発足にあたり支部会員を十分発掘できていないという現状があります。この会報をご覧戴いた方の中で、もしポストン近郊に在住の方がいらっしゃるいましたら是非支部会員として加わっていただけましたら幸いです。さらに今後の留学が決定しポストン近郊に來られるような方がおいでしたらあわせて幹事(Email: Juzen.Boston@gmail.com)までご連絡をお願いいたします。最後になりましたが、ポストン支部会にご援助いただきました同窓会本部事務局に御礼申し上げますとともに今後益々の十全同窓会のご発展を祈念いたします。



(集合写真…皇太子殿下ご訪問時の写真とともに撮影)(山本靖彦・圭子 記)

クラス会

而立会(昭和二十七年卒業)

「而立会」は、昭和二十七年に金沢医科大学(現金大医学部)を卒業した医師達の同期会である。而立会の名付け親は大屋昭夫君(故人)である。卒後五十六年、而立会の還暦も近くなった。

これまで、而立会は金沢を起点として、東北から関西に亘る各地で開催されてきたが、今回は、学生時代、または卒業の或る時に、一度は訪れたことのある奥能登、珠洲の地で行なわれ、平成二十年九月十四・十五日の両日、珠洲ビーチホテルの而立会には、同伴者を含めて二十二名が集った。

丁度、此の時、須々神社では、秋の大祭が行なわれていた。須々神社は、紀元三世紀の半ばに建立されたと伝えられる、奥能登では由緒のある社である。十四日の夜、境内には高さ十六米もある国内では最大級の「きりこ」が四基集



り、人出も多く、総漆塗の「きりこ」から受ける圧力を私達は楽しんだ。

総会では、高齢化が進むこれからの而立会について討議が行なわれ、当面、石川県と富山県のグループが交互に会の運営に当ることになった。引き続き行なわれた懇親会では、県の無形民族文化財に指定されている「御陣乗太鼓」(輪島市名舟)が披露され、間近に見る男達の勇壮な太鼓の響きさばきから、出席者は奥能登に生きる人々の心情に思いを馳せたのである。

十五日の「而立会奥能登観光」には十名が参加した。須々神社では秘宝の蟬折笛を拝観した。此の笛は、奥州へ逃れる途中、源義経が海難を避けるために奉納したものと伝えられている。また、小泉元首相が訪れたことでも有名になった「千枚田」は、今、農家の後継者不足からボランティアが中心となって運営しているためか、昔日の面影が薄れていて、過去を知る人達にとって、気になる風景であった。

そして、此のミニツアーは、能登空港で終った。今回の行事に、身体の不調から参加を見合わせる仲間が多く、健康の回復と多幸を祈っている。参加者は、○梅崎伸、織田邦夫、太田昇、○小林豊、島田昭三郎、○須山忠和、関和夫、○竹田亮祐、○橘武彦、○恒元博、寺崎元人、富田喜一郎、○長林勝彦、前田昭治、道下忠蔵、(○印は同伴)、等の諸氏であった。

(恒元博 記)

医王会(昭和三十二年卒業)

昨年卒業後五十周年(金沢・和倉開催)を終えて来年は京都でやろうと決まっていた。世話人は大阪在住の前川が引き受けることとなった。京都は千年の古都であり、全国から集まりやすいという理由だった。時期はやはり錦秋の頃として十一月二十二・二十三日の連休を選んで四十名前後の希望者があったが直前までには体調不良の辞退者が増え、結局、級友二十名夫人八名が当日嵐山温泉の老舗旅館渡月亭へ集まった。当日、翌日とも想像を絶する大混雑で渡月橋も人であふれていた。さすが京都の秋だと感心した。

遠来は常連の北海道からの福山君、九州から久し振りの竹下君が参加してくれた。宴会に先立って二十二名の物語者(今年は島木君)への黙祷が始まり、京懐石料理を味わいつつ旧交をあたためた。皆後期(高貴)高齢者になり話題は主に回顧談、友の消息や健康状態、老後の生き方などが多かった。二次会は貸切バーで夜の更けるまで語り合った。

翌日は天気も良く嵯峨嵐山駅からトロッコ列車で溪谷



の紅葉を楽しみ、亀岡から二時間半の保津川下りの舟旅を満喫した。初めての友も多く童心に帰ってスリルを堪能した。舟を下りてからが大変、想定外未曽有の混雑で昼食どころまでの移動が予定より一時間遅れ、午後に嵯峨野散策を予定していたが集団行動は無理と判断して中止して食後自由解散とした。席上、翌二〇〇九年は山口君を中心に東京・南関東在住の級友が世話人となって開催することに決まった。

帰り、道路、駅、電車が人であふれ、皆ばらばらになつてしまふ無事帰られたか心配した。

出席者・安達、石丸、井村(同夫人)、大島、岡本、加子(同夫人)、河村(同夫人)、菊地(同夫人)、杉山、鈴木(同夫人)、竹下、近沢、西、西川、福山、前川(同夫人)、松田<sup>孝</sup>、松田<sup>嘉</sup>(同夫人)、宮崎(同夫人)、山口。 敬称略

(前川 誠 記)

三六会(昭和三十六年卒業)

昨年十月錦秋の熱海は大観荘にて昭和三十六年卒の同窓会が開かれた。関東での開催は過去何度も望まれて来た経緯があり、年々の宿願であった。その準備は早くも五、六月頃から関東地区在住の同窓生に呼びかけ、七名(伊藤俊夫、小山博誉、多田信平、長基顕、向平淳、柳川洋、中川正明幹事長)による幹事会は東京で複数回も開き打ち合わせするという念と力の入れ方であった。

この関東初の三六会はず前夜祭行事として、晴天が続く伊豆は名門川奈ホ



テルゴルフで奥様同伴コンペが行われた。翌十月十二日は遠く伊豆七島が霞む海を見晴るかす高台の松風がそよぐ横山大観ゆかりの「大観荘」に全国各地から二十三名が参集した。宴会は羽衣中広間にて中川正明地元幹事長の開会挨拶のあと、全員は三原淳良、河合光輝、佐伯吉昭の三君への黙祷を行った。次いで進行は柳川洋君に引き継がれた。宴もたけなわで参加者全員が一人ひとりと立席し近況報告を展開した。人生も七十歳を経るとそれぞれは老成と完熟を醸し互いの健康を祝う喜びを満たしながら、いつしか若い日のなつかしい思い出やエピソードで笑いさんざめいていた。翌十三日エキスカーション予定説明で、企画担当の向平は「M A O美術館と鎌倉散策」は参加者半減でバス旅行を中止(事前連絡済)し、規模縮小を改めて謝罪した。この千載一遇の好機を逸した失敗を快く了承してくれた温情や励ましは同級生ならばこそであった。宴会の中締めは千葉の伊藤君が行った。二次会はクラブ「スターライト」でカラオケが競われた。さらに各部



屋に帰っての親密な話し込みは睡眠時間をどれほど侵蝕したことだろうか。翌朝の熱海はさらに快晴の空で、全員は朝食を共にして再会を約した。そして全員はM A O美術館鑑賞組と北陸、関西、東海、関東への帰路組に別れたのであった。

(向平 淳 記)

## 「金大医四十一卒業クラス会」 イン福井二〇〇八

平成十八年十月七日、ホテル日航金沢において卒業後四十周年記念クラス会が開催された際、次回は二年後に福井在住の同級生が世話をする様指名を受けた。そこで、森田信人、土屋雅之、谷川裕平澤邦彦、中井継彦が世話をする事になり、春から数回の打ち合せ会を開き、準備をすすめ、平成二十年十一月十五日(土)に福井駅前のユアーズホテルフクイにて開催した。福井と言え「越前蟹」です。越前蟹を是非賞味していただきたいと考え、解禁したばかりの時期にと日程を設定した。今回は六組の夫婦同伴者を含めて二十九名の出席者でした。集合写真を撮った後、午後六時より開会した。

会中は中井の司会のもと、森田君の開会の辞により始まり、まず物故者に対し黙祷をした。大変残念なことに、昭和四十一年三月卒業時七十四名いた同級生の中から既に七名(神本正憲、小野江為久、小西(中川)馨、中務紀、難波晃、金井武雄、柳下邦男)が亡くなっています。特に前回からこの二年間に四名を亡

くしており、ほとんどが癌によるものでした。前回金沢でのクラス会を世話をした柳下君からはクラス会へ出席するとの返事をもらっていましたがクラス会直前に訃報を聞き大変残念でした。

福井は世界的に有名なハープの産地です。永平寺町にある青山ハープで名器が作られています。また、雨田光平、光示氏など著名なハープリスト、指導者がいたこともあり、数多くのハープリストが育っています。福井市出身のハープリスト中井絢子氏によるハープ演奏では、アイルランド民謡のスカポローフェア、日本の赤とんぼ、紅葉、レハールのウインナーワルツなどハープのすばらしいメロディーを楽しんだ。

土屋君の乾杯の発声により会食を始めました。「越前蟹」の特別会席では、せいこ蟹甲羅盛り、茹で越前ずわい蟹、蟹味噌「珍味入れ」などを中心に越前の山の幸、海の幸を心ゆくまで賞味した。

また地酒コーナーでは越前岬、黒龍、梵、花垣、一本義を用意し、飲み比べていただき大変好評でした。会員の近況報告では病院勤務の方はすでに定年退職し、次の新しい道へ踏み出したこと、また開業している級友は医院・病院の承継などの話が多く、時の流れを強く感じさせられた。最後に次回のクラス会は級友の多くが古希を迎える三年後金沢で開催することが決められた。平澤君のウィットに富む中締めの挨拶の後ホテル内の二次会会場に席を移し、歓談した。

翌日はゴルフ組(担当土屋君)とエクスカーション組(担当谷川君)に分かれて楽しんだ。ゴルフコンペは芦原ゴルフクラブ、海コースで行ない九名が参加し

た。雨模様にもかかわらず優勝、ベストグロス賞(グロス八五)とも内藤一馬君がとり、学生時代のスポーツ万能選手の面影を彷彿させるプレーでした。エクスカーションは十名の参加を得て、永平寺↓恐竜博物館



(勝山市) ↓杉山鉱泉(昼食) ↓丸岡城のコースで福井ならではの観光地を楽しんだ。予定のスケジュールを無事終了できたこと、幹事一同感謝するとともに、次回金沢でのクラス会には数多くの級友が元気に出席できることを祈念している。

### 出席者(敬称略)

板谷興治、勝見哲郎、木下昭、小西三三男、佐野譲、白石制、新正浩、杉森恵夫妻、高橋悌二、谷川裕、土屋雅之夫妻、内藤一馬、中井継彦夫妻、橋本琢磨、橋本正夫、平澤邦彦、藤原徹、万見新太郎夫妻、水野洋一夫妻、宮崎公臣、森田信人夫妻、若泉悟、渡辺甫

(中井 継彦 記)

同窓生の消息

新教育棟において想う  
「雨森芳洲の末裔——良順」のこと

金沢大学名誉教授 竹田 亮 祐

雨森芳洲は、上垣外憲一の著書「雨森芳洲——元禄享保の国際人——」（中公新書）を通してつとに知られていたが、とくに一九九〇年五月に来日した韓国の盧泰愚大統領が宮中晩餐会の答礼で「誠義と信義の外交官」として雨森芳洲を讃え、その後、二〇〇二年三月に訪韓した小泉元首相が昼食会のスピーチの中で芳洲の「誠心の交わり」を引用したこと、さらに芳洲を生んだ滋賀県高月町が雨森芳洲庵を拠点（東アジア交流ハウス）に芳洲の伝記の編纂や韓国の生徒たちとの友好交流事業をはじめてから一層関心が高まったようになった。高月町は、近隣には十一面観音で有名な渡岸寺があるの

で友人知己を時々案内することがある。また、金沢大学医学部十全同窓会名簿大正元年卒の筆頭に雨森良順の名があり、かねてから雨森家所縁の方に相違ないと思っていた。最近、高月町雨森の地で代々の医家を継いでおられる雨森正高先生（三十四代）にお会いし同家にのこされている遺品を拝見させていただき奇縁にめぐまれ、良順先生が正しく大正元年金沢医学専門学校卒業式において答辞を述べ高安右人校長から銀時計を授与された英才であったことを知った。これより先、学校は藩校時代の校舎使用（大手町の石川県甲種医学学校校舎、殿町の金澤病

院）の不便さを解消するため土取場（現在の宝町キャンパス）に近代的医学教育設備を統合する工事を進めつゝ、あつた（明治四十年秋に第一期着工）。その竣工祝賀式（明治四十五年三月末）に際し、良順は生徒総代としての祝辞のなかで新設成つた建築の壮観を今時の学生諸君がととも持ちあわせない美辞麗句、流れるような文体をもつて述べている。以下に全文を掲げる。

祝 辞

今や肇春淑氣陽々トシテ天地ニ靡キ彩雲暖カニシテ黄鶯ノ清音梅樹ノ間ヨリ薫風を送ルノ時我母校多年ノ宿望ナリシ校舎新築ノ一部竣工ヲ告ゲ本日ヲトシ茲ニ移転式ヲ挙行セラレ生等此ノ威拳ニ列スルヲ得蓋シ至大ノ幸栄ト謂ウベシ 顧フニ本校創立以來廿有五歳ヲ算スルモ其間己ムヲ得ザル状態ニ於イテ校舎諸所ニ散在シ為メニ学ブニ同一ノ校門ヲ出入スル能ハズ教ヲ受クルニ当リテモ或ハ東ニ或ハ西ニ赴キ而シテ多大ノ不便ヲ俾ビ貴重ノ時間ノ浪費ヲ以テシテモ尚其ノ完ヲ得ル能ハザリキ 蓋国運ノ隆盛ヲ期シ国力ノ強大國歩ノ進化ヲ致スモノ之ヲ教化ノ普及ニ待タズシテ何ゾ夫レ得ベケンヤ 教化ノ普及ハ学校ノ設備ニヨリ始メテ達シ得ベ

キナリ況ンヤ医学ノ深遠ナルニ於ケル学ブニ足ラズ修ムルニ充ツル能ワズシテ何ゾ能ク済生ノ偉業ヲ期シ得ベケンヤ 而モ我母校隆運日ヲ追フテ威ナルヲ觀ル此レ他マシ 校長閣下並ニ諸先生各位ノ御熱誠ナル御率励ト御薫陶トニヨリ 先輩諸兄及ビ生等又克ク此ニ耐ヘ忍ビ刻苦勉勵以テ其分ニ忠実サリシニ由ルナリ。今や我校土木工ヲ竣ヘ旧時ノ觀ナシ即チ仰ヒテ薨瓦ヲ望メバ突尤乎トシテ愈々高ク俯シテ校庭ヲ觀レバ曠々乎トシテ潤シ 輪奐ノ美ヲ極メ匠刻ノ精巧ヲ喝シテ余ス所ナシ 即チ体ニ於テ其極ヲ尽セリ 心タルベキ生等豈奮起セザル可ケンヤ 本日ノ威拳 肝ニ銘ジ髓ニ徹ス爾後益々校則ノ遵守シ諸先生ノ御教導ヲ享ケ淳朴至誠奮勵致々トシテ學術ヲ進修シ以テ我が校ノ愈々隆威タラン事ヲ誓ウ 聊力蕪辞ヲ欽シテ謹ンデ 祝辞トナス

明治四十五年三月二十五日

金澤医学専門学校生徒代表

雨森 良順

私は、去る五月（二〇〇八）に久しぶりで医学生に講義をする機会がありその折、新しい教育棟設備の立派さに隔世の感をおぼえた。一指にもみたくないメモリースティックを持参すれば、講義内容は学生一人ひとりの目の前の十七インチ液晶パネルに放映されるのである。もし良順先生がこの風景をみたらどのように感じ何とおっしゃるだろうか？八十三年目の大改築、教育設備の進歩は目を見張るばかりである。学生諸君よ！いよいよ、奮起勉勵せよといいたい。

因みに雨森一門会記念誌によると、雨森家系には医師が多く同郷で医業の傍ら俳諧を好んだ良医、雨森良圭は華岡青洲の門人であったことが刻まれている。（種々貴重な資料をご教示いただいた雨森正高先生に感謝します。参照…「雨森家系図集覧」「第四回雨森一門会記念誌（二〇〇五）」）

雨森 良順



大正元年卒業生記念写真



# 医学部百五十年史のための覚え書【25】

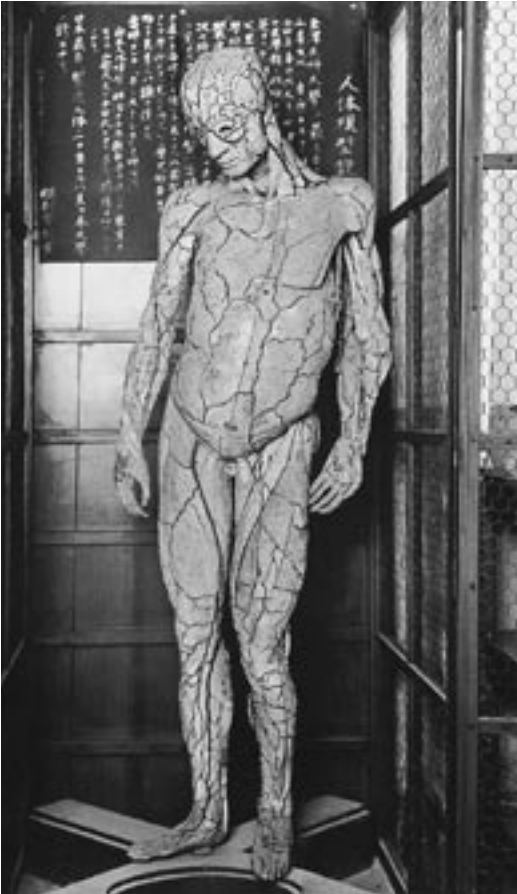
## キンストレーキに関する

### 金子治郎名誉教授の回想記

寺畑 喜 朔

記念館資料室に保存の人体紙塑模型キ  
ンストレーキは重要文化財級であるが、  
製造から約百五十年経過し、明治初期に  
は医学生らが直接手に触れて勉強したた  
め、破損状況はかなり進んできた。昭和  
五十一年第七十七回日本医史学会（会長  
高瀬武平教授）が本学で開催の際、従来  
から解剖学室標本庫に保管されていたキ  
ンストレーキを学会準備委員長であった  
筆者より高瀬会長に提言し、専門業者に  
より記念館資料室に移転した。このキン  
ストレーキがこの度中村学長の多大の配

慮により国立修理所において全面的修理  
がおこなわれることとなり、山本博・田  
中重徳・井関尚一教授立会のもと引き渡  
された（一四一号に掲載）。さて、キン  
ストレーキの導入事情についての記述文  
献は殆んどなく、ただ一点金子治郎名誉  
教授による大正末に遺された「回想記」  
の中にあるので、覚え書として全文つき  
に示す（原文は図書館にあったが数頁の  
冊子のため、度々探したが発見されない  
ことを付言する）。



記念館保管のキンストレーキ

余方就任の当時教具ノ主ナルモノハ醫  
學館時代ノ遺物タル「キンストレーキ」  
及其所屬品デアツタ。其他和製ノ腦纖維  
模型等二三ヲ見タ方格別目立ホドノモノ  
ハナカツタ。此「キンストレーキ」ハ前  
田藩方大金ヲ擲テ購ヒ故人伍堂卓爾翁等  
ガ特ニ香港マデ出張シテ持參セルモノデ  
アルト聞イタ。而シテ昔日標本ナキ時分  
ハ唯一ノ教材デアツテ甚ダ貴重サレタ事  
ハ言フマデモナイ。余方ハジメテ之レヲ  
拜觀シタノハ明治六年ノ春テ余方醫學館  
ニ入學シタ前年デアツタ。當時之レヲ擔  
任セル教師ハ手垢ノ附著スルヲ慮レ、先  
ヅ手袋ヲハメ頗ル鄭重ニ離解シテ説示シ  
タノデアル。素ヨリ擔任者ノ外人モ之  
レニ觸ルルコトヲ許サナカツタ。然ルニ  
斯クモ優遇サレタル先生モ爾來開放サレ  
生徒方各自勝手ニ取扱フ様ニナリ、從ツ  
テ次第ニ損傷ヲ生ジ、遂ニハ本型ニ組立  
ツルコトモ不可能トマデ大破セシハ甚遺  
憾ナリキ。余ハ明治十四年七月職ヲ辭シ  
テ東上シ、東大解剖學教室助手トナレ  
リ。當時東大醫學部ノ南、龍岡町ニ面  
シタル通門ノ長屋ニ北川某ノ擔任セル  
一工場ガアツテ、教具ノ修繕ヤ新調ニ從

事シテ居タ。某監督指導者ハ解剖術デ有  
名ナル故今田東先生デアツタ。今ノ山越  
ノ隱居（尚存命ノ筈）ハ北川ノ助手デア  
ツテ、北川ノ歿後其遺業ヲ繼承シタノガ  
彼レ成功ノ發端デアルト信ズ。延テ翌明  
治十五年余ガ暑中休暇ニ歸省シ、田中校  
長ノ諒解ノ下ニ大破セル「キンストレー  
キ」ヲ携ヘ歸東シ、今田先生に請フテ修  
繕シタノデアル。斯クテ約半歳ヲ費シ漸  
ク出來上ツタ。實ニ見事ニ出來上ツタ。  
手袋時代ノ姿ニ再ビ蘇生シタバカリデナ  
ク、今田先生ノ工夫ニテ皮下ノ神經ヤ其  
他新々ニ附加サレタモノモ少クナカツ  
タ。而シテ修繕費トシテ北川氏ニ支拂ツ  
タノガ金貳百圓デアツタ。扱スル歴史ヲ  
有シ、幾百ノ學生勉學ニ貢獻セシ「キン  
ストレーキ」先生モ、時代ノ進運ニツレ  
秋ノ扇子、今ハ誰レ訪フ人モナク、獨リ  
寂シク講堂ノ一隅ニ悄然トシテ佇ム。我  
等恩澤ヲ蒙リタルモノ轉々感慨ニ堪ヘザ  
ル次第デアアル。

（注）なお、この回想記の図書に関する項に  
「キンストレーキ」に所属の図譜……の保存  
を記述しており、この図譜の所在を検索し  
たが、未だ発見されていない。



修理搬送作業中のキンストレーキ

## 第一〇三回 医師国家試験

医学部長 金子周一

第一〇三回の医師国家試験の合格率は八八・一％となり全国平均の九一・〇％を下回りました。全国の大学における順位も昨年の四十七位から六十五位となりました。今年は既卒の十一名中八名が合格し、既卒者の成績は全国九位でした。新卒者九十八名のうち十名が不合格となったことが大きく順位を下げた原因でした。

そこで、この不合格者を見ると、ほとんどが卒業時の成績不良者でした。当然のこととして、学生は各科目の授業を受け所定の成績をおさめたものしか卒業しておりません。確かに、卒業時における各科目の合格判定が甘すぎたのではないかとという疑問が残ります。しかし、同時に不合格とした科目の学生を臨床科目の教員が責任もって一年間、しっかりと教育することの困難さも窺えます。さらに、成績不良であっても国家試験に合格するものが少なからずいること、国家試験に落ちても翌年には全員が合格する今年のような事実があることから、卒業時の合格判定をどうするかはむずかしいものがあります。

分析をすすめると、不合格者の十名は、全員が留年生であるか、四年生のCBTの成績あるいは科目試験に問題があると判定された学生でした。この学年は五年、六年の授業への出席を特に厳しくした学年でしたが、この成績に終わりました。これまでの不合格者もそうでしたが、このように四年生の時点で国家試験

不合格者の多くが決まっている事実があります。このことから、本年度の四年生から五年への進級判定を厳しくしていません。もしかすると、さらに低学年の時から不合格者が決まっている可能性があり、対応を考えております。

学生だけでなく大学が変わる必要があります。東大、京大も国家試験の成績は良いものでありませんし、九州大学の合格率は八七・七％と金沢大学より低いものでした。しかし、旧帝大も研究だけでなく医学教育を重視するようになってきています。本年度に金沢大学でも県の寄附講座で医学教育を研究する講座が設置されます。また、学生はコアカリキュラムに沿った、国家試験を見据えた教育を行うことを教員に求めています。皆様のご協力を得て、より良い医学教育を行っていく必要があると思っております。

第103回医師国家試験結果 ※ ( )内は第102回結果

	受験者	合格者	不合格者	合格率	全国平均
平成21年3月卒業生	98名 (101名)	88名 (97名)	10名	89.8% (96.0%)	94.8% (94.4%)
平成20年3月以前の卒業生	11名 (11名)	8名 (4名)	3名	72.7% (36.4%)	54.3% (62.2%)
合計	109名 (112名)	96名 (101名)	13名	88.1% (90.2%)	91.0% (90.6%)

## 謝恩会

私たちの大学生時代は、医療がテーマとして広く世間に問われた時代でした。そんな時代に、新臨床研修制度の下、多くの卒業生が研修医として社会に船出します。平成二十年度卒業生九十八名はその礎を金沢大学で築き上げました。特に近年の先生方の過分なるご指導や教育には多大なる恩恵を受けたと思います。その感謝の意を込めて、今年はいままでの謝恩会を踏襲し特に盛大に行いました。多くの先生方にご参加いただき、そして良いものを創ろうとする謝恩会委員達の努力のおかげもあり、結果成功裏に終えることができました。私達の謝恩会は、会場内は明るく、そしてオーソドックスに話すことを重視しました。そのせいもあって、にぎやかな雰囲気醸し出されていたらと感じました。その雰囲気の中、学生時代を走馬灯のように振り返るととても良き時代を、ここ金沢で先生方と過ごせた

ことに更なる感謝の意を覚え、恵まれた学生時代を送っていたことを改めて実感しました。光陰矢の如しとはよく言ったもので、過ぎ去った時間は短く感じるものですね。

最後に、謝恩会にご参加いただいた先生方そして私たちが学生の頃にお世話になった全ての先生方に深く御礼申し上げます。どうもありがとうございます。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願ひします。

平成二十年度謝恩会委員代表  
医学部医学科六年 奥村健一朗

## 平成二十一年三月卒業生進路

青木 裕 市立敦賀病院  
荒木 大佑  
安西 誠 聖路加国際病院  
池田 侑子  
石元 玲央  
一場 剛  
市堀 博俊



伊藤健太郎	稲田悠記	稲積達郎	井上己音	井上大輔	今井朝彦	宇津木紘子	遠藤利洋	大瀧聡史	大西裕之	大浜多鶴子	大野壮史	大柳琢	岡島京子	岡部真也	岡部佳孝	奥村健一朗	小田晃廉	鏡京介	加藤博史	神野範子	川北哲也	殿畑侑也	木田明彦	木村真也	黒井康博	黒川義博	小林玄洋	小宮陽仁	権藤興一	齋木迪子	齋藤裕人	齋藤ゆいば	櫻井龍	佐々木拓幸	佐藤啓	佐藤滋彦	澤田翔	澤村俊孝	村木義隆	鈴木由梨奈	関ルイ子	瀬口龍太
		金沢大学附属病院	金沢大学附属病院	石川県立中央病院	恵寿総合病院		埼玉協同病院	大阪労災病院		みやぎ県南中核病院	富山県立中央病院		黒部市民病院	黒部市民病院		金沢大学附属病院				手稲溪仁会病院	石川県立中央病院	石川県立中央病院	富山県立中央病院		東京女子医科大学東医療センター	松部市民病院	上尾中央総合病院	東京医科歯科大学医学部附属病院		高岡市民病院	福井県立病院	横浜栄共済病院	横浜市立大学附属病院	国立病院機構埼玉病院	金沢大学附属病院	名古屋第一赤十字病院	金沢大学附属病院	金沢大学附属病院	東京大学医学部附属病院		金沢大学附属病院	

竹内太郎	武澤雄太	武田直也	竹之内豪	武原聡子	田崎優子	田中総一郎	谷本梓	田原奈津子	榊井達也	津田耕作	手塚瞬	寺田和始	内藤暢茂	永井一正	中村さや	中村優貴	立花宏一	入田英二	西川智貴	西川裕行	額裕海	羽柴智美	原田智也	馬場恵史	樋口貴史	古郡慎太郎	眞館周平	松井智美	丸賀庸平	丸銭祥吾	御子柴雄司	峯村佐和子	宮澤正樹	宮永亮一	村橋賢	谷内薫	柳川泰昭	山木愛久	山口恭平	山下勇樹	山田雅之	山本浩隆			
筑波大学病院	福井済生会病院			金沢大学附属病院	公立能登総合病院	癌研有明病院		金沢大学附属病院		横濱市立大学附属市民総合医療センター	大垣市民病院	金沢大学附属病院		中部ろうさい病院	京都第一赤十字病院				十和田市立中央病院	福井県立病院	金沢大学附属病院	厚生連高岡病院	長岡中央総合病院	長京女子医科大学東医療センター	公立能登総合病院						東京医科歯科大学市川総合病院	岡崎市民病院	深谷赤十字病院		富山県立中央病院	豊橋市民病院									黒部市民病院

平成21年度  
医薬保健学域医学類入学者  
出身都道府県



結城 緑  
 柚原 悟史  
 吉田 真貴  
 吉田 光紗  
 済生会宇都宮病院  
 豊橋市民病院

吉田茉莉子 東京慈恵会医科大学附属第三病院 (五十音順)  
 (進路については本人の同意のもとに  
 記載しています。編集委員会)

### 同窓会名簿改訂についてのご案内

本年度は十全同窓会名簿改訂を行います。  
記載内容(住所や勤務先・役職等)に変更がある場合には、同封の「確認届」にて、十全同窓会事務局宛、またURL: <http://juzen-ob.w3.kanazawa-u.ac.jp/>にてお知らせ下さいませようお願い申し上げます。

### 締切日

平成二十一年六月三十日(火) 必着

### 連絡先

〒920-1864 金沢市宝町十三番一号  
金沢大学医学部 十全同窓会名簿編集係  
E-mail [juzen@med.kanazawa-u.ac.jp](mailto:juzen@med.kanazawa-u.ac.jp)  
FAX 〇七六-二三四-四二〇八  
TEL 〇七六-二六五-二二三二

十全同窓会名簿編集委員長

古川 俣



変更届けがホームページ上で可能になりました。

URL: <http://juzen-ob.w3.kanazawa-u.ac.jp/>

## DVD・VHS「金澤医科大学時代の教育・研究・診療風景」好評頒布中

### 八〇年前の金沢大学医学類が今蘇る

大正末期の金澤医科大学(金沢大学医学類の前身)の授業・実験・課外活動および附属病院での診療風景を収録。当時の医療の様子を伝える貴重な映像です。

### ■内容

- 医科大学全景
- 医学化学教室
- 細菌学教室
- 法医学教室
- 附属病院全景
- 内科学教室
- 小児科学教室
- 皮膚科学教室
- 精神病学教室
- 外科学教室
- 眼科学教室
- 耳鼻咽喉科学教室
- 秩父宮殿下御台臨
- 十全会水泳部

現在の金沢大学医学系研究科・医学部(全約七十五分)

### ■価格

DVD、VHS

各一〇,〇〇〇円(送料込み)

### ■お申込方法

左記事務局にお名前、ご住所をご連絡下さい。申込用紙(ゆうちょう銀行の払込票)をお送り致します。払込票に必要な事項を記入のうえ、代金をお振込下さい。お振込頂いてから二週間程度でお届けいたします。

E-mail: [juzen@med.kanazawa-u.ac.jp](mailto:juzen@med.kanazawa-u.ac.jp)

FAX: 〇七六(二三四)四二〇八

電話: 〇七六(二六五)二二三二

担当: 山岸 浩子

### 編集後記

平成二十年度も終わり、金沢大学医学部は新しい卒業生を送り出しました。本号の表紙を飾る金子周一医学部長の言葉にもございますように、本学学生は全国医学部のトップクラスの成績で入学し、最良の医学教育が施されているという自信を持っておりましたが、昨今、教育の現場において信じ難い学生によるゴシップが聞こえてきます。本学医学部の教育、研究、診療レベルに対する疑念感に基づく内容です。一昨年の卒業生に金子部長が送られた言葉の中にも、金沢大学医学部卒業生の「心映え」とございませうように、本医学部の伝統的な教育には、医師としての志を大切に、さらに医学の素養を磨き、研究マインドを持った医師を目指すことにあると思います。

コアカリキュラムやガイドラインだけの教育だけの実施では、小さく固まってしまいます。そのため英語での最先端の教育や定説にはなっていない研究内容をも授業で紹介したりしております。しかしながら中村信一金沢大学長が、金沢大学のヴィジョンの一つに「我が国ベスト十大学を目指すこと」を掲げられておられますが、その原動力は医学系であることは間違ありませんので、今まで以上に目に見える形で評価されるようにならなければなりません。医師国家試験の合格率に代表されますように、世間一般が評価しやすい所は確実に押さえる必要があることは疑いありません。さらに一層の飛躍を目指して教育改革を始めとする新しい取り組みに、医学系教員が丸と丸となつて頑張る時期が来たように思えます。本年春には新外来診療棟が完成し、病院正面には、新たに「石引の広見」が出来上がり、新しく衣替えしました。この機会に、十全同窓会の諸先生にお越し下さり、叱咤激励を賜れば幸いです(中村 裕之 記)